



朝日21関西スクエア 会報

2004-7
第65号

Asahi Kansai Square 21

朝日新聞大阪本社 1879年(明治12年)創刊

現場/地域から

ユニークな大阪ブランド「大阪コレクション」

川嶋みほ子 大阪コレクション開催委員会 運営事務局長・ロゴ(有) 代表取締役

皆さまは、「大阪コレクション」(略称:大コレ)をご存知ですか?大阪出身の世界的デザイナー、コシノヒロコさんの提唱を受け、「世界の桜舞台で活躍できるクリエイターの発掘・育成」などを目的に、大阪の行政と経済界が協力して1987年から開催している関西最大のファッションショーです(写真=04/05秋冬大阪コレクションより)。年2回(4月、11月)の大コレには、毎回数千人の観客が訪れ、大阪発の最新モードを楽しんでいます。

創設者の1人で、事務局を預かっていた関西ジャーナル社の折目允亮(おりめ・まさあき)社長が昨年2月に急逝したため、部下であった私が急遽、後を継いで今に至っていますが、実は私自身も、初回から舞台裏を守り続けて来た「大コレの生き字引」を密かに自任しています。

コレクションといえば、世界の5大コレクション(パリ・ミラノ・ニューヨーク・ロンドン・東京)が有名ですが、大コレには、それらと異なる特長がいくつかあります。特に、入場券を買えば誰でも見学できる(通常はプレス・バイヤーと特定の顧客に限定)、活動を始めて間もないデザイナーでも、1度だけ無料で作品を発表できる「新人ステージ」を設けて人材育成に主眼を置いている、などの点では、世界に類を見ないものなのです。

毎年、厳しい選考をパスした若手がこの舞台を踏み、これまでに巣立ったデザイナーは80人を超えました。その



中から、全国的なカリスマデザイナーに成長したり、海外市場に進出する人材を次々輩出し、まさに「若手デザイナーの登竜門」としての役割を果たして来ました。さらに海外にも門戸を開き、ヨーロッパの新進デザイナーが、大コレ参加を機にブレイクしたという例も多く、大コレの

評判は現地でも口コミで広がっているそうです。そして、この4月に来日したソウルのデザイナー林賢姫さんも、「大コレは韓国でも高く評価されています」と語ってくれました。

大コレが生んだのはデザイナーだけではなく、89年に参加した韓国のトップデザイナーたちが、大コレに触発され「ソウルコレクション」を作ったことは大いに誇るべき実績です。そしてこの6月、北海道で「旭川コレクション」が産声を上げました。大コレ誕生の経緯を偶然ホームページで知った1人の青年が、それを手本に、景気の低迷する地元を活気づけようと企画したもので、私も記念すべき第1回を観るため現地まで足を運んでみました。どちらかといえば「お祭り」的なイベントでしたが、独自の情報発信への取組みと、町を挙げての熱気には、こちら学ばべきものがありました。

この他、モデルやショー制作スタッフなどの人材も数多く育ち、将来ファッションの道を志す学生たちも、若いデザイナーの活躍の場を目の当たりにして、ずいぶん啓発されたことでしょう。そして何より、私自身が大コレに育てられたことを心から感謝しています。

...と、良いことばかりを並べてきましたが、このご時世、大コレも必ずしも楽な運営をしているわけではありません。行政の財政難、経済界・ファッション界を取り巻く厳しい環境の下、一時は継続を危ぶむ噂も流れたほどでした。しかし、「多くの実績を重ねながら18年も継続してきた大コレは、大阪に活力を与える大阪ブランドそのものだ。決して火を絶やしてはならない」という貴重なご意見も、多くの方々から頂戴しました。これからも、皆さまのお知恵とお力をお借りして、さらなる努力と工夫を続けて参りたいと存じます。ご支援・ご指導のほど、どうぞよろしくお願い申しあげます。

(かわしま・みほこ)

主催:大阪コレクション開催委員会 伏見府・大阪市・大阪商工会議所・大阪21世紀協会・関西経済同友会)

URL: <http://www.webmarket.co.jp/o-collec/>

(会 員 消 息 ● 伝 言 板)

立命館大学教職教育推進機構の久保富三夫さんから。

長い間お世話になった楠高校の生徒・教職員の皆さんとお別れし、4月から立命館大学で教員養成の仕事をしていただいております。「平和と民主主義」を教学理念とする末川先生ゆかりの大学で勤務できることを有り難く思っております。

転職してからも子どもに関わる痛ましい事件があとを絶たず、テレビ・新聞・週刊誌などのマスメディアにより連日取り上げられています。とりわけ私の神経を逆なでするのは、教師に対する安易な責任追及です。第一に、教師が置かれている日常、(とくに新学習指導要領下での激烈な多忙化)に対する無理解、第二に、子どもの学校生活を教師がさらに管理・監視することを結果として要求していること(現在でも極限状況。多くの中学校の昼食風景をご存知?)、第三に、教育行政の教育条件整備の遅れと、その中で突出した「教育推進の責任を無罪放免していること、第四に、1990年代以来の「新しい学力観」や早期教育の弊害が子どもの人格形成に与えている影響に切り込んでいないこと、第五に、これらの結果、ますます『心の教育』の徹底」という態度主義の強化を文部科学省に言わしめる余地を与えていること、などです。

ところで、話は変わりますが、私が心配していることは、「今日の学校に道徳教育の基盤はあるのか」ということです。教師は、「ウソをつかない」、「間違っていたら謝る」、「他人を脅したり暴力で支配しない」、「互いの違いを尊重しよう」と子どもたちに教えてきました。さらに、教師は、「もし殴られても殴り返したらあかん。我慢しなさい」とまで説いてきたはずです。私もそうです。実際に、学校の中で暴力事件が起こり殴られた生徒が殴り返した場合、多くの学校(高校)ではこの生徒も「特別指導(家庭謹慎等)」の対象となるのです。

しかし、ここ2~3年の世界の動き、そして、日本政府の責任者の言動は、当たり前前の道徳を覆すことばかりではないでしょうか。「ウソを平気でつく」、「間違っていたら謝らない」、「言うことを聞かない奴は力でねじ伏せる」、「相手が殴る前に殴っても良い」、これらのことを子どもの前で堂々とやって見せたのです。「力が『正義』」ということもしっかりと叩き込んでくれました。「言葉のすり替え」によって何でも通ることも示してくれました。これで、「心の教育」を言われても、教師はたまったものではありません。当たり前前のことですが、生徒の心のありようは学校内では純粹培養できないのです。

昨年度、私は楠高校で生徒指導部を担当しており、幾つかの暴力行為の指導に関わりましたが、「殴られそうだったから先に殴った。何が悪いのか。」と生徒が言い張ったらどう答えようかと内心びくついていました。楠の生徒はそのような「へ」理屈はこねませんでしたが(こねてほしかったなあ)。

今日も全国の教師は、「ウソをつかない」、「間違っていたら謝ろう」、「他人を脅したり力で支配してはいけない」、「互いの違いを尊重しよう」と生徒に説き続けていることでしょう。

でも、先生方、その言葉を向ける先は子どもたちだけでいいのでしょうか。また、先生ご自身に葛藤はありませんか。

障害者問題研究所所長の楠本利夫さんから。

このたび妻が2週間の海外旅行をした。心臓病と脳梗塞で介護保険を利用している私は、その間、「独居老人」となった。病後こんなに長い間ひとり暮らしすることがないの

で随分心配した。

しかし、それは取り越し苦労であることが分かった。

事前にケアマネージャーさんが、妻の留守中の介護プランを立ててくれた。

一番の問題は、私が料理を作れないことだ。これは、土、日を含めて毎日、三度三度の食事作りにヘルパーさんが通ってくれた。同時進行で洗濯機も回して干してくれる。

次に心配なのは、私の体調の管理である。週に3日、看護師さんが訪問してくれて、血圧、脈拍、体温などを調べて、健康上の心配があれば、24時間安心ダイヤルで相談にのってくれた。

さらに週に2回、家の隅々まで掃除をしに来てもらった。

リハビリには、作業療法士さんが週に1回訪問リハ。お陰で快適な2週間であった。

妻は安心して出発し、無事に帰国した。

ところで、利用者負担がいくらになるのか。まだ請求書は届いていない。今後、政府は自己負担率を引き上げる等の「見直し」は、しないで頂きたい。必要な人が誰でも利用できる制度への見直しこそ大事なのである。

立命館大学教授の辻井栄滋さんから。

日本ジャック・ロンドン協会を設立して早満11年が経ちました。あの『野性の呼び声』や『白牙』で知られ、今日もなお世界で最もよく読まれつづける米国の作家(1876 - 1916)の研究・交流の場です。先日(6月12日に)は、その第12回年次大会を横浜市は関東学院大学文学部棟の一室をお借りし、学部学生・院生諸君を含め60名もの参加者を得て、盛大に開催し終えたところで感無量といったところです。

さて、そのひと月ほど前の5月8日(土)には、10名の会員その他の同行者の皆さんも来ていただき、米国はルイジアナ州のシュリーヴポート市にあるセンテナリ大学のCommencem ent(卒業式)にて、これまで30余年のJ・ロンドン研究・翻訳出版・振興活動等々の功績が認められての博士の称号を受けました。信じられないような評価をされ、長いあいだ悪戦苦闘してきたことが報われ、心からうれしくありがたいことだと思っています。

今後、これに倣ることなく、力の続くかぎり、上記の活動を続けてまいる所存です。

シダックス株式会社の藪下義文さんから。

比較法史学会より共同論文集「Historia Juris 比較法史研究 思想・制度・社会」第12号(発売元:未来社)を出版した。特集テーマは「戦争装置としての国家」である。著者達の視座としては、国家が戦争の装置であるという厳しい現実を直視しながら、比較法史の方法にて、文明史、特に、文明の摩擦と衝突を照射しようとするものである。小職は「イラクにおける新しい国民国家のあり方 イスラム法と英米法の共生に向けて」を担当した。国連の安保理事会でイラクへの主権委譲のスキームが、米国と独・仏の妥協の産物として決議される一方、イラク国内では、宗派、部族が自己の国家像を掲げて血みどろの争いを続けている。本稿は、7世紀以来のイスラム法支配を土台に、20世紀に入って英米から移植された立憲制度が長いタイムスパンにおいてどう共生していくか、イラクの憲法制定過程に焦点をあてて記述したものである。皆様のご批評をお待ちしております。

会	員	と
	↓	
一	時	間

「ミツコ・イシハラ」の願い

「三装」代表取締役社長ファッションデザイナー 石原 光子さん

石原さんは婦人服の「三装」の経営者であり、ご自身でデザインも手がけられています。ずいぶんお忙しいでしょうね。

私どもは製造販売卸ですので、全国の間屋や小売店のみなさまと商売をさせていただいていますが、店頭では夏物が動いていますし、その一方で、秋冬物の受注と生産をしています。来年度の春夏物の展示会は9月に開きますから、そのデザインとともに、今期の秋冬の追加デザインや生産もあり、目まぐるしさは大変なものです。季節の先取りと、現物とが入り乱れて企画の仕事場はまさに戦場のようです。また、当社ではちょうどピラミッドのように、高級ブランド「ミツコ・イシハラ」を頂点として、1万円前後のブラウス、1万数千円のシルクのリバーシブル半コート、50万円クラスのカシミアのチンチラ毛付きコートなど裾野も広く、それぞれのお店のご要望に応えられるような努力も欠かせません。

洋服のデザインをされる時、どんなことを考えているのですか。

より細く、より若く、より美しく見せることができ、着心地のよいものであれば、みなさまに買っていただけます。そうした洋服であれば、「幸せ」もいっしょにお持ち帰りいただけます。「より細く、より若く、より美しく」という女性の夢を叶えられて、みなさまにご満足いただけるように、というのが私どもの願いであり、そのために心血を注いでいます。つまり、着て楽しくなり、周りも明るく楽しい気持ちにさせられる服づくりを極めたいですね。

「着てみたい」「買ってみよう」、さらに「あそこの服なら絶対」という評価をいただき、固定客となっていただく事こそ、私たちの満足と喜びなのです。実際にお召しいただいた後のお声こそが絶対評価であり、それに応える商品をお届けできるよう努めています。

いっごろからデザインに取り組むようになったのでしょうか。

「三装」の前身は、主人(基氏)が創業した個人商店で、昭和40年(1965年)株式会社の「三装」となりました。私が専務に就いて、デザインにも携わるようになりましたが、それが斬新だと評判となり、テレビ、雑誌といろいろ取り上げられ、「ミツコ・イシハラ」は「飽きが来ない」「着心地が最高」などデザイナー冥利に尽きる評価をいただき、ブランドの知名度も上がりました。1986年には韓国の国際的な賞もいただきました。

実は結婚する前、映画に出演させていただいたり、モデルに登用していただいたりしたことがあります。こうした経験が「着てみたくなる服を創る」という感性を育て、現在のファッションを構築する土台になったかも知れません。

本職以外に講演に出かけられるし、最近まで大阪日日新聞にコラムを連載されていました。

テレビ出演や雑誌の対談、さらに朝日新聞にもエッセイ

を書かせていただいたことがあります。大阪日日新聞の連載は1500字のコラムで、ずいぶんと反響もいただきました。

このほか、みなさま方がドレスアップして出かけられるように、100~300人ほどの交流の場を設けたり、それより小規模の30~70人ほどの方々と「ミツコのサロン」を開かせていただいた



りしています。サロンの方はみなさまといっしょにお食事をしたり、ラテン歌手の高橋キヨシさん、「ミスタートラ」の唐渡吉則さんらをお招きしたりしたこともあります。また、私が「運気を掴む」と題して講演させていただいたことや、東京から著名な国会議員がSP付きで来られて政界の裏話をされたこともありました。こうした企画を実行して、みなさまに楽しんでいただければ、それが、ささやかながら関西の活性化にもつながるのではないかと考えています。

周りのみなさま方には、いつも夢を持ち明るく、努力と感謝の気持ちの日々を送りましょうとお話しています。

やはり、いつまでも努力が必要なのですね。

毎年、世界中で、それこそ何万人というようなデザイナーの卵が誕生しまして、そうした人たちも懸命に勉強を続けています。この世界では、過去の名前だけでは生き抜いていけません。

当社のデザインがよく、他社でも出て参りますが、この世界は抜きつ抜かれつでして、真似をされるという事は当社の商品がよいということですし、新たなアイデアが次々と湧いてくるものですから、別にどうということはありません。それだけ当社の評価が高いということだと判断しています。

私どもが、今日あるのはお客様のお陰でございます。それに感謝し、それにお応えするには、もっと夢のある、素敵に見えるものを生み出すことだと信じています。そのため、さらに感性を磨き抜こうと励んでいます。

(聞き手・桑山明彦)

いしはら・みつこ 大阪市出身。昭和28年(1953年)夫・基(もとい)氏が「三装」の前身である個人商店を創業。昭和40年(1965年)株式会社「三装」へ。基氏の死去に伴い、1998年から社長。本社は大阪市中央区大手前1丁目、OMMビル19階。東京、ミラノなどにもオフィスを構える。子息が副社長と専務。

ハルモニは悠久の地に眠る

李 有師 (NPO法人「もうひとつの旅クラブ」理事長)



昭和初期、母一人子一人で日本に渡ってきた8才の少女(私の母)も今年76才。少女の母親であったハルモニ(おばあちゃん)は、戦中戦後を大阪・八尾で暮らし、15年前その八尾で息を引きとった。

ハルモニの遺言はただひとつ「ふるさとの丘に墓を」だった。茶毘に付された遺骨は希望通り母の手で、韓国慶尚南道、プサンの田舎にある「ふるさとの丘」に里帰りした。

ただ、その田舎や丘、お墓についての風景は、口伝えに聞くことはあっても、行ったこともなければ写真で見たこともなかった。それが昨年来、足の具合が悪くなってきた母の希望で「お墓を守ってくれている親類にも会えることだし、私が元気なうちに一度皆で行かないか」というプランが持ちあがった。

母と兄、妹らの都合が一致し、ついに墓参りにすることになった。釜山には27年前、3日間だけ観光したことがある。まだ、夜間外出禁止(午前0時以降)の時代、観光とは名ばかりで、ピリピリと緊張した街とチクチクと刺すような視線が、日本と韓国の関係を投射しているようで観光どころではなかった。

約30年ぶりのプサンは、神戸を巨大にしたような大都会になっていた。海が迫り息切れするような角度の山肌に、超高層住宅が何本も何本も、いやというほど「直立不動」していて、人口380万人の勢いがぶつかりあっていた。

5月31日午前8時、プサン旧市街のホテルから、目指すは西に約70キロの咸安(ハマン)市。「南海高速道路」を、チャ

ーターしたタクシーがぶっ飛ばす。いたる所で阪神高速のような渋滞に出くわす。ぶっ飛ばしても意味がないような気もするが、ぶっ飛ばす。約1時間半、ハマンのインターチェンジに到着。日本の地方都市と同じ風情で「田舎」のイメージはない。市街地を10分ほど走りハルモニと母の「ふるさと」である「在所」に近づくと、奈良・明日香のような出で立ちを、そこ、ここに発見!「?」が頭によぎる。

新羅の都、慶州(キョンジュ)の古墳群なら知っているが、あそこは慶北、ここは慶南。百済の都がある全羅道はまだまだ西だ。お墓を守ってくれている親類の家は、もっこりとした“小山”が続く麓にあった。日本の在所と同じような、それでいて屋根の曲線や壁の材質など、感性の急所はまるっきり違う韓国の在所だ。

ハルモニのお墓は、そんな「在所」や“小山”の群をはるかにのぞむことができる丘とも、山とも表現できる頃合の場所にあった。母と幼なじみ元気バリバリの生き字引のような親類のおばあさんの「指導」で、母の母、気丈で「韓国女」の典型にさえ感じたハルモニへの墓参り、韓国式の墓参りがかった。

ひとしきりお参りを終え、あらためて付近を観察し遠望した。やはり“小山”は墳墓の連なりのように見える。さらに山々の中心、ハルモニのお墓のすぐ下には、何やら新築の博物館のような、コンクリート打ちっ放しの建物が見える。

疑問は確信に変わり墓参りを終えると、そのコンクリート打ちっ放しに直行した。閑散とした駐車場を見れば今日、月曜日が休館日であることは理解できた。付近をうろろして

面からつづく

会員消息 ● 伝言板

桃山学院大学名誉教授の徐龍達さんから。

(1) 在日韓朝鮮人「大学教員懇」の再生

日本の国公立大学「外国人教員任用法」を獲得して、世界の外国人研究者に教授への道を開拓したのは、「在日韓国・朝鮮人大学教員懇談会」(「大学教員懇」、1972年10月発足)でありました。「定住外国人の大学教員任用を促進する会」(日高六郎・飯沼二郎代表)のご支援も忘れることができません。

文部科学省と公立大学協会の2003年度統計などにより、約1500人の外国人、そのうち約300人の韓朝鮮人研究者が大学公務員として採用されています。

「大学教員懇」の代表幹事をつとめた私は、任用法成立の翌年、1983年に後継者にバトンタッチしましたが、残念なことにその4代目の90年代後半から「休眠」状態に陥りました。

近年に至り、韓日間をめぐる諸問題と在日韓朝鮮人の課題について、大学教員としての働きが必要である、との認識が高まり、昨年数回、「大学教員懇」の再生をはかる会が開かれました。その結果、全国規模で旧会員の郵便投票による役員選挙が行われ、次のとおり新役員が確定されました。

代表幹事 = 徐龍達、幹事 = (関東)姜徳相・滋賀県立大学名誉教授、(関東)鄭大声・滋賀県立大学名誉教授、(中部)権泰殷・名古屋外国語大学教授、(関西)全在紋・桃山学院

大学教授、(関西)鄭早苗・大谷大学教授、(関西)吳満・大阪経済法科大学教授、総務 = 鄭早苗教授が担当。

早速、「大学教員懇」では、今後の運動方針と規約の改正を協議するとともに、新入会員の募集に入りました。

(2) 私の視点」が「ヘラルド朝日」に掲載

朝日新聞3月27日付拙稿、「外国人参政権 - 落選運動と税供託で実現を」が、Herald Tribune, The Asahi Shinbun, June 18, 2004に掲載 (Oust lawmakers who nix vote for foreigners) 多くの英文読者に読まれることになりました。本稿については、朝日新聞の松井京子さんと、「ヘラルド朝日」の有田弘さんのご協力をえまして大変感謝しております。前国会にもその法案が公明党から再提案されています。

本稿の最後に私は、「もしも日本で定住外国人の地方参政権が認められるならば、日本社会はよりいっそう尊敬される国際国家としての基盤を強固にするものと確信する」と結んでいます。

鳥取県在住の作家、内田照子さんから。

イラクで日本人フリー記者が襲撃されたというニュースがテレビで報じられ、その記者が橋田信介さんとおいの小川功太郎さんらしい顔写真など映像として流された瞬間、橋

私のメッセージ

いたら、建物から「どこからお見えですか？」と日本語が聞こえた。(母はバイリンガルだが、私は流暢な大阪弁しかできない)日本の大阪からハルモニの墓参りに」と告げるやいなや、「それなら見てゆきなさい。私が案内してあげますから」と、丁寧なおさそいをいただいた。

その親切な方は、この「咸安博物館」の学術研究士、白承玉(ベク・スンオク)さん。日本でいえば主任学芸員、昨年の10月完成したばかりのこの博物館は、高句麗、百濟、新羅の三韓・三国の時代、大国の百濟と新羅にはさまれ位置した小国の連合体、加取(カヤ:伽耶なども表記される)の都、その中心にあるとの説明(注)。

日本史では一般的に任那(みまな)と表わされるこの地域は、周辺を600mほどの山々に囲まれた盆地で、イメージ的に奈良や滋賀県の山間地そっくり。白先生の説明によれば、特に大きな墳丘だけでも37基見つかっており、中小を入れると1000基を超える韓国第一級の大古墳地帯であることが最近になって、はっきりしてきたらしい。

この地域への調査・研究がやっと本格的になり、その中心施設が「この博物館というわけです」とのことだった。また、車輪形土器や馬甲(馬につける武具)など、貴重な発見が「現

在進行形」で、国宝級の馬甲は1992年、アパート工事現場から偶然発見されたもので、「まだまだ何が出てくるかわからない」日本でもこの地で生産されたと考えられる出土品が数多く



韓国家屋典型的な縁側(母左側と親類のおばあさん)

発見されています」と熱っぽく説明してくださった。

私はすっかり感動してしまい、思わず「ハルモニは悠久の地に眠る」など、意味不明の発言をくり返す。白先生も「古来、この地域から日本に渡った人は数多く、日本語のパンフレットも準備しています。日本に帰ったら、あなたの郷里でもある、この『ふるさと』を宣伝してください」と、おたがいが韓国人らしく熱くなる。何冊かの日本語パンフレットと共に、この3月末に発行されたばかりの立派な図録まで託された。



韓国語をしゃべれないばかりか、この大川沿いにある日羅公之碑の国の地理、歴史にも浅いボクの頭の中に、わが愛するNPO「もうひとつの旅クラブ」の面々が思い浮かんだ。まちづくりNPOの認証を受けた「旅クラブ」は、大阪の歴史や文化に学ぶ「まちづくり」を実践している。

新羅によって滅ぼされた任那は、その復興を日本の朝廷が担い、日羅という有能な外交官が、その任にあったという。その「日羅公之碑」が北区同心1丁目にある。私が暮らす天神橋2丁目とは目と鼻の先。

6世紀の話が、いま21世紀に息づく気配がした。今秋は大阪城で秀吉公のヒミツも探らなければならない。

さてもNPOは忙しい。

(り・ゆうじ)

(注)小国の連合体であったこの地域は、正確にはここで書いた説明では不十分。白先生は無知な私でも理解できるよう、ごく簡便に解説してください。より正確に知りたい方は現地を旅し、その目で確認してください。咸安博物館の住所は、大韓民国 慶南 咸安郡 伽耶邑 道項里 748

ちなみに白先生は東京大学に留学経験があり、関西への留学も計画しているとのことだった。ハマンへはプサンから高速バスや鉄道の便もある。

会員消息 ● 伝言板

田さんの方は深夜テレビのイラク問題についての討論会(田原総一郎さんのテレ朝「朝まで生テレビ」)で見かけただけであったが、小川さんの名前と顔には、出会った記憶があった。どこで会ったのか、と。

新聞やテレビで彼らの経歴が紹介されて、あと思った。小川さんは前の私の家に、3度訪ねてきた青年だったのだ。私の前の家は鳥取市内の旧袋川に面したところであり、小川さんが昨年まで勤めていたNHK鳥取放送局は、対岸の距離としては5分くらいのところ。彼が初めてわが家を訪れたのは、5、6年前だろうか。ディレクターをしていた小川さんは、いつも玄関での立ち話であったが、玄関まで本が溢れていたわが家に、資料として本を借りにきたり、返しにきたりしながら、出身は山口県だとも語っていた。

まだ20代半ばの小川さんは、今回の報道された写真よりは、もっと痩せていて、美しく礼儀正しい好青年であった。が、私も鳥取市内から転居し、その後の小川さんの消息は知らなかった。戦場カメラマンとしておじの橋田さんとバンコクを拠点に転身し、たくましい中年に成長していたことを、彼らの死によって知ったのである。

橋田さんの妻幸子さんの、ふたりの死以後の覚悟の姿や言葉、夫の遺志を継いでモハマド・ハイサム・サレ八君を日

本へ招いて眼の治療を受けさせた行為は、私の目と心に痛いほど印象的だった。

甲南女子大学教授の島田博司さんから。

話は少し遡りますが、4月に島田博司編『ケルン ~ 自分飾りからの脱出物語』(甲南女子大学)を出版しました。これは、この欄でこれまでも紹介させていただいている、大学生対象の「自分史エッセイづくり」の一貫をなすものです。

今回は、キャンパス・ライフをいい意味でエンジョイすることに成功?した学生たちのエッセイを中心に編集しました。その結果、「自分」をめぐる、自分飾り、自分なくし、自分試し、自分さらし、自分づくり、自分磨きなどのキーワードが浮かびあがってきました。わかったことは、いつの世も変わらないことかもしれませんが、まさに「艱難(かんなん)汝を玉にす(Adversity Makes A Man Wise Not Rich)」ということです。そんな体験を積み重ねた学生の心は、なんと自由になることか。

読んだ人たちに共感の輪が広がり、早速5月には【大学ガイド版】として装いも新たに版を重ね、広く高校生に読んでいただけるようになりました。読書ばなれの進む人たちの手に届くだけでなく、心に届くかどうか。気になるところです。

作家の玉岡かおるさんから。

初のノンフィクションを7月15日に新潮社より上梓。『タカラジェンヌの太平洋戦争』(新潮新書)がそれ。

タカラヅカでしか味わえない華やかでモダンな舞台を封じられ、国策に合わせなければならなかったばかりか、大劇場までもが警沢禁止令によって閉鎖されてしまった戦争時代。今年90周年を迎える宝塚歌劇団の歴史の中でも、もっとも苦しい、冬の時代といえるでしょう。

その時代、タカラジェンヌたちはどう生きたのか。またファンたちの夢や、希望はどうなったのか。

その時代を生きた戦前・戦中のタカラジェンヌたちに実際にお会いしてのインタビューをまじえながら、「戦争を知らない」世代の一人である玉岡かおるが、太平洋戦争下のタカラヅカを語ります。

これを読めば、コムズカシイ知識としてではなく、生きる喜びとしての彩りであるタカラヅカが、きっとあなたにもわかるはず。タカラヅカを愛するすべての人にささげます。

**「ゆび書の世界」主宰の辻和雲さんから。**

雲流書法会選抜展のお知らせ。7月16日(金)から18日(日)まで、エル大阪(大阪府立労働センター)3・4ギャラリーにて、社中の選抜展を開催します。躍動する21世紀、今日も妖しく深い書の世界に魅かれて勉強を続けています。

作品は、毛筆・ゆび・ペン・スプーン・ティッシュペーパー・櫛・竹・ほうき・うちわの骨子・杓子刷毛などで書かれています。

表現の世界に限界はないのです。人間の営為が、ある瞬間の動きにのる時の新しい発見と感動は、その都度忘れることができません。どうか御高覧下さい。

「姓名短歌」主宰の辻歌子さんから。

7月10日(土)15時から、朝日カルチャーセンター・神戸(神戸市中央区三宮町)にて姓名短歌の実作教室を開くことになりました。姓名短歌は姓と名を三十一文字に詠み込む遊びです。自分の名前や身近な人の歌を作って楽しんでいただこうと思っています。

日本出版学会理事、日本ペンクラブ電子メディア委員会委員の湯浅俊彦さんから。

なんと4月から大阪市立大学大学院に社会人入学して、はやくも修士論文に取り組んでいます。今年は「メディア論」の非常勤講師をお休みして、私自身学習しているという次第です。

近況をいくつか。5月15日(土)に國學院大學にて開催された日本出版学会春季研究発表会にて「デジタル時代における出版の自由 電子タグ問題を中心に」というテーマで研究発表をしてみました。電子タグとはICチップとアンテナを内蔵したタグのことで、接触することなくデータの送受信が可能であり、商品そのものに埋め込むことができることから、ユビキタスネットワーク社会実現の観点から期待されています。しかしその一方で、電子タグによるプライバシー侵害の可能

性や知的財産権の拡張といった問題も指摘されています。

このテーマに関しては、大阪市立大学大学院で9月11日(土)電子タグ関係のシンポジウムを私が発起人の一人になり企画。大阪市立大学文化交流センター(大阪駅前第2ビル)にて開催予定です。出版、図書館の分野における電子タグ導入事例や実証実験を検証しながら、今後の展開を考えようとするもの。詳細は決まり次第、改めてご案内します。さらに、電子タグ関係では出版業界誌「出版ニュース」6月下旬号に「電子タグは出版産業に何をもたらすのか」を執筆しました。

一方、日本出版学会が5月に刊行した紀要『出版研究』第34号(2003年度)に「電子出版関係年表」を公表しました。これは1985年から2004年までの日本におけるオンライン出版、オンデマンド出版、CD-ROM出版、そして電子図書館関係の出来事と文献を年表化したもので、この分野における今日もっとも網羅的な年表になっています。

また、日本出版学会では5月、『白書出版産業 データとチャートで読む日本の出版』(文化通信社)を刊行しました。この本は統計と解説と年表をもとに日本の出版産業を読み解くもので、79項目を日本出版学会会員のうちの60人が図版やグラフでデータを示しながら分担執筆。私は「書店の経営構造分析」の項目を執筆しています。日本の出版メディアにご関心のある方はぜひ一読をお願いいたします。

アニメックス災害研究所の伊永勉さんから。

来年1月15日(土)~16日(日)に開催される阪神大震災10周年「メモリアルカンファレンス」において、同時に開催する市民のためのイベントを企画し運営するための実行委員会を設立します。今回は市民・ボランティア・企業等、様々な分野からの自由な参加を公募したいと考えています。昨年までは、炊き出し、演奏、ゲーム等が催され、1日当りの参加者数は4,000人規模となりました。会場は神戸市中央区「人と防災未来センター」です。

お問い合わせは、NPO大規模災害対策研究機構(06-6477-7171)事務局川下まで。

上方文化評論家の福井栄一さんから。

1. 関西大学社会学部で『コミュニケーション特論』を講じています。「ことば」と「からだ」をキーワードにして、上方の芸能文化史を学生諸君に解説していますが、彼らの多くが古典芸能の舞台と如何に縁遠いか、いまさらながらに驚かされます。地球の裏側のリゾート地についてなら、お勤めのレストランまで知っているのに、自分たちの先祖が涙し狂喜してきた舞台芸術については無関心。

2. 6/21(月)発売の『大人組KANSAI』第2号(株)ジラス編)にエッセー『上方志向』掲載!

3. 7/16(金)午後4時~箕面のコミュニティFM放送「タッキー81.6」のインタビュー番組に出演します。

4. 主たる講演会の予定は以下の通りです。

(1)7/1(木)午前10時~大阪府老人大学東部講座講演会『鬼・雷神・陰陽師』(於)大阪府立中央図書館大会議室

(2)7/22(木)午後7時~尾崎地区民主促進協議会講演会『笑いは生きる力をくれる』(於)赤穂市尾崎公民館

(3)7/23(金)午後3時45分~サザンユース会講演会『安倍野が生んだヒーロー 安倍晴明』(於)大阪市立安倍野市民学習センター

〈財〉大阪市都市工学情報センターの池田順一さんから。

京阪奈学研都市のNTTコミュニケーション科学基礎研究所オープンハウスに参加して、若い人がそれぞれ自分の研究テーマにとり組み自信をもって、人に伝えようとしていることに感激しました。人コミュニケーションに関しての優れた基礎研究を実施するだけでなく研究成果をわかりやすく紹介する姿勢がたのもしい。

例えば、人間の眼からは入力される信号が脳に伝えられて、精密な映像情報を認識する過程において不安定な動的な眼球位置の相当のぶれが見事に補正されるしくみを簡単な画像を組み合わせて理解させるプレゼンテーションなどは説明力が抜群に高い。

これにより、聞く人は自分に備えられている器としての価値、それを長い間、故障も無く使わせていただける感謝が自然と湧き上がりました。このような基礎研究が行われているだけでなく、だれにもわかりやすく紹介できる機会が設けられている価値は大きいと思いました。

弁護士の坂和章平さんから。

2004年5月号の会員消息・伝言板にてお知らせしました『いま、法曹界がおもしろい!』(254頁・定価1600円(税別))が5月26日、民事法研究会から出版されました。

この本は、坂和総合法律事務所編のもので、弁護士生活30年の弁護士坂和章平を中心とし、昨年10月に私の事務所に入所した新人弁護士と事務職員歴18年の事務局長の2人を共同執筆者に加えたものです。

司法修習や実際の裁判の様子、法科大学院の実情等をわかりやすく解説するとともに、司法試験の合格体験や法律事務所の日常業務や経営術、そして個性豊かな弁護士の実態などをユニークな切り口から分析し、紹介したものです。

すでに本書をお読みいただいた弁護士や大学の先生、友人諸氏などからは「本音を書いた本で本当に面白い!」といううれしい感想を寄せられています。

法曹界を目指す方々や法曹界に興味がある方々はもちろん、特に興味のない方でも通勤・通学時の「読み物」として、手軽に楽しんでいただけるものと自負しています。是非皆様にもお読みいただき、法律事務所や弁護士を身近に感じていただきたいと思います。

そして本書をお読みいただいた感想をお寄せ下さい。また皆様の知り合いの方々にも推薦していただけると幸いです。

「地球に謙虚に」運動代表の仲津英治さんから。

びわ湖自然環境ネットワークが取り組んでいる湖西和邇浜でのヨシ復活作戦で、ヨシが新芽を出し、成長を続けているとか、嬉しい話です。

このたび、「地球に謙虚に」運動の呼びかけ人として新たにお三方に参画していただくこととなりました。

これで呼びかけ人の人数は当初(平成15年(2003)8月)の32名から49名に増加しました。

「地球に謙虚に」運動ホームページNo1

<http://www.hpmix.com/home/ise/kenkyon/>

ホームページNo2

<http://www.5fbiglobe.ne.jp/kenkyon/>

池上曾根史跡公園協会公園長兼事務局長の吉房康幸さんから。

平成13年(2001年)5月にオープンした池上曾根史跡公園(弥生時代を代表する遺跡)ならびに弥生時代のモノづくりが体験できる池上曾根弥生学習館の運営に携わって4年目に入りました。

史跡公園はこのほど入園者が100万人を突破、弥生学習館は65,000人を超えました。とりわけ、勾玉や土笛、ガラス玉、土器づくりなどが体験できる弥生学習館は「手づくり文化」が見直される中で、平日は小中学校の団体、週末の休日は家族づれで賑わいます。

この弥生学習館では、体験学習以外に講演会やフォーラムも開催しており、去る5月9日を皮切りに6月にかけて紙漉(す)きや文化財の修復など、伝統の技を今に伝える名人たちが語るフォーラム「匠の世界 日本の伝統技術は今」を開催しました。

日本の伝統技術を知ってもらい、その素晴らしさや重要性を伝えようと池上曾根史跡公園協会と(財)大阪府文化財センターが主催して、昨年からはじめたものです(今回の内容と講師は次のとおり)。

5月9日=100%の楳(こうぞ)で漉き、版画に最適の和紙「生漉き奉書」・人間国宝の岩野市兵衛さんと先代の市兵衛さんに師事した八木米太郎さん。

同30日=絵画などの文化財修復に欠かせない「名塩紙」・人間国宝の谷野武信さん(写真・上)と金沢美術工芸大教授の柳橋真さん。

6月6日=国宝・重要文化財の絵巻物や壁画など文化財の修復に従事する「装こう師」で文化財修復の第一人者、岡岩太郎さんと和泉市久保惣記念美術館長の河田昌之さん。

同13日=全国の数ある木綿の中でも最も特色を有する幻の佐治木綿(幕末に生産が絶える)を柳宗悦が京都の骨董市で発見、「丹波布」と命名して世に紹介、国の記録すべき無形文化財に指定され、その復元に取り組んだ足立康子さん(写真・下)と月刊『染色アルファ』元編集長の富山弘基さん。

「丹波布」は、すべて手作業の工程を経るため生業として成り立たず、「生漉き奉書」「名塩紙」も採算面から存続が危ぶまれています。文化財の修復に欠かせない「名塩紙」は、製紙技術の継承が強く望まれています。現在では僅か2軒です。

匠の職人を招聘してシリーズで取り上げるのはあまり例がなく、関東や四国、中国など遠隔地からの参加者もありました。

池上曾根弥生学習館の所在地は、泉大津市千原町2丁目12-45(JR阪和線・信太山駅から8分)、電話=0725-20-1841





ネットの夢と闇

渥美 好司 科学医療部長

中之島から
nakanoshima

最近のインターネットにかかわるニュースには明るい話題がない。

たとえば、長崎県佐世保市で起きた小学6年生による同級生殺害事件は、ネット掲示板への書き込みが引き金になったといわれる。インターネット接続サービス「ヤフーBB」では660万人分の契約者情報が流出した。

その少し前には、違法コピーを蔓延させる元凶だとして、京都府警がファイル共有ソフトを開発した東大大学院助手を逮捕した。開発者の逮捕が不当かどうかの論議は別として、助手の自宅からは「ハッカー向け」と称するマニア雑誌が多数押収された。音楽CDや映画DVDのプロテクトをはずしてコピーする方法、ネット上のわいせつ画像を効率的に集める手法など、危うい話題が満載だ。

ちょうど10年前、朝日新聞社は「デジタル・ネットワーク・カフェ」というシンポジウムを開いた。ネット先進国から参加した全米科学財団の1人はこう告げた。「昔の米国にはいくつも電話会社があり、相手によって別々の電話機が必要だった。その後、電話網は相互につながれ、1台の電話

機で間に合うようになった。インターネットは、ばらばらなコンピューターをつなぎ、1台の端末で対話できるようにする世界的なコンピューター網だ」

当時日本はインターネットという言葉自体が目新しく、どのマスメディアもネット普及で到来する明るい未来を強調した。爆発的に普及するという予測はあたり、国内のインターネット利用は7730万人(昨年)、人口普及率が初めて60%を超えた。

しかし、冒頭にあげたようなネットがもたらす闇の部分を予測する力は不十分だった。研究者、技術者たちはつねに「夢」を追う。彼らの身近で取材することが多い科学記者はその夢に感化されてしまう。ある大学教授に忠告されたことがある。「科学の発見も新技術の開発もこざいところからは生まれぬ。猥雑さとか闇を抱え込んでいながら進歩がある」と。

ネットワールドの表裏をとらえた記事を書かねば、と自戒の日々である。 (あつみ・こうじ)

シンポジウム

広島で国際平和シンポジウム

ことしの夏も広島市で国際平和シンポジウムを開きます。朝日新聞社と広島市、広島平和文化センターの主催。7月上旬、朝日新聞に詳細を掲載し、聴講者を募集する予定です。概要は次の通りです。

【日 時】8月1日(日)午前10時から午後5時まで

【会 場】広島平和公園内の広島国際会議場で

【テーマ】再び築こう核廃絶の流れを 強めよう都市と市民の連携

関西スクエア会員で聴講希望の方は、関西スクエア事務局へ直接ご連絡ください。

活動報告

第2回の企画運営委員会を開催

朝日21関西スクエアの今年度第2回企画運営委員会が6月25日(金)、朝日新聞大阪本社との会議室で開かれました。委員の石森秀三(国立民族学博物館教授)、高村薫(作家)、寺田千代乃(アートコーポレーション社長)、橋爪紳也(大阪市立大学大学院助教授)、山極寿一(京都大学大学院教授)のみなさんと、朝日新聞社側からは24日付の人事異動で東京本社編集局長補佐から大阪本社編集局長に就任した田仲拓二のほか、論説副主幹・川名紀美、編集局長補佐兼生活文化部・福家康宣、経済部長・和泉純、社会部長・大塚義文、科学医療部長・渥美好司、地域報道部長・阿部正史、スポーツ部長・浜村康弘らが出席しました。

田仲編集局長らのあいさつの後、山極委員が「ヒトの進化と多様性：和解と暴力の間で」のテーマで講演をしました。この内容は朝日新聞の文化面に掲載される予定です。

事務局から

関西スクエアの事務局では、さまざまなシンポジウムの企画・運営も担当しています。会場探しをはじめ、パネリストらのみなさんとの交渉、パンフレットづくり、聴講の申し込み受付など、舞台裏の仕事はいろいろとあります。順調に進めばいいのですが、トラブルが起きることもあります。現在、広島市で開く恒例の国際平和シンポジウムのほか、三つのシンポジウムの準備を並行して進めています。そうした中、会員のみなさま方のご協力で、7月号の会報を期日通りに発行することができました。ありがとうございました。 (桑山)

妻の母が1年ほど前に亡くなり、以来、毎月墓参りに出かけています。母の墓の近くに、太平洋戦争で戦死した方のお墓があるのに気づきました。中学、海軍兵学校を優秀な成績で卒業、戦艦や駆逐艦に乗り組み、太平洋で戦死したと、墓石には刻まれていました。まだ30そこそこの若さです。残された家族の無念がにじんできました。見回せば、戦死者のお墓のなんと多いことか。中国、ビルマ(ミャンマー)、ニューギニア……。亡くなった場所がそう刻まれています。こんな遠くでなぜ、とむなしくなります。日本は再び、戦争をする国になるのでしょうか。 (山本)

朝日21関西スクエア事務局

スタッフ 桑山明彦、山本博之、小原明子

〒530-8211 大阪市北区中之島3-2-4 朝日新聞大阪本社内 TEL 06-6231-0131(内線 6850) FAX 06-6443-4431
E-mail square.k@asahi.com URL http://n tt.asahi.com /kansaisq/index.html